

論文

雑誌『スタイル』に見る宇野千代の「新しいきもの」

A Study on "New Kimono" in the Magazine *SUTAIRU* edited by UNO Chiyo

松尾 量子
MATSUO Ryoko

This paper examines articles, essays, and photographs on kimono found in the magazine *SUTAIRU*, and clarifies what exactly was the "new kimono" advocated by UNO Chiyo. The "new kimono" was created with her deep understanding of kimono and her unique sensibility that was not bound by conventional wisdom, and several prototypes were embodied in the magazine *SUTAIRU*.

1. はじめに

『スタイル』は、昭和期を代表する女性作家である宇野千代(1897-1996年)によって、1936年6月に創刊された雑誌である。『スタイル』は、宇野千代自身が、日本版『ヴォーグ』の意気だと語っていることや、創刊初期の新聞広告などから、グラビアによって欧米のファッション情報を伝える雑誌という印象が強い。しかし、第1巻第2号(1936年7月号)以降、和装に関する記事や写真が掲載され、第3号以降は宇野千代が和装頁の編集責任者となり、和装に関する記事や随筆が充実してゆき、和装は、『スタイル』を特色づける重要なコンテンツとなる。高橋晴子は、1930年代後半から1940年代前半にかけての10年間について、「後半を戦争に閉ざされた暗い時期ではあったが、一方ではようやく洋装の成熟があり、他の一方では和装は退潮にまだ足を踏み入れず、日本人の衣の文化のなかで、和装と洋装の拮抗した華麗な一〇年弱だった」として、この時期の異色の存在が『スタイル』であったと述べている¹⁾。

『スタイル』における和装については、青木淳子が、創刊号から第2巻第6号(1936年6月号)までの『スタイル』に掲載された和装に関する記事や随筆等についての数的調査と質的調査およびその分析を行い、戦後、きものデザイナーとして活躍する以前の宇野千代のきもの美意識について考察している²⁾。この小論では、1938(昭和13)年5月に内務省警保局の「婦人雑誌ニ対スル取締方針」により、雑誌の内容面での規制が強化されるようになる第3

巻6号(1938年6月号)までの『スタイル』を資料として、宇野の提唱する「新しいきもの」が具体的にどのようなものであったのかを明らかにすることを目的とする。資料は、臨川書店による復刻版『スタイル』(2003年)を用いた。資料の引用に際しては、原則として仮名遣いは原文のままとし、旧漢字は現在の形に改めた。また、表記の読み取りができないものについては「○」を記した。

2. 第1巻第2号(1936年7月号)に掲載された和装

『スタイル』に、和装に関する記事や写真が掲載されるのは、第1巻第2号(1936年7月号)からである³⁾。第2号では、全40頁のうち、見開き2頁が和装にあてられている。1頁目には森田たまによる夏の浴衣についての随筆「夏すがた」と宇野千代による「みをつくし—夏の和装のご注意帳—」が掲載されている。「みをつくし」は、和装を指南するコラムであり、掲載は不定期である⁴⁾。第1回は、宇野が足袋や草履、肌襦袢から帯や腰紐などについての夏の装いの注意事項を述べている。その最後に宇野は、広幅のカーテン地で作った木綿の帯を以下のように紹介している。

カットの写真は広巾ものカーテン地で作った帯。一ヤール三円六十銭の木綿織物。くすんだ桃色に淡墨をまぜたゆたかな渋い色の感じが、写真に出ないのが残念です。仲の好いお友だち二人で組んで、四ヤール九尺五六寸の美事な丸帯が二つとれます。高島屋でみつけた私の得意な異国趣味です。⁵⁾

この帯は、第1巻第4号（1936年9月号）において、宇野の創案による粗い格子の着物と組み合わせた写真（図2）に掲載されることになる。

深川の鰻屋「宮川」の主人であり随筆家でもある宮川曼魚⁶⁾は、第1巻第3号の「みをつくしー夏のうすものその他一」において、宇野のカーテン地の帯について触れ、「変わった裂地の帯が出てゐましたが、異国趣味と言へば唐棧なぞ印度が本場らしい。アメ唐などと言つて、アメリカから来た唐棧もありますが、どうもこの唐棧はあちらの洋服の裏地ではなからうかといふ節もあります。」と述べ、溪斎英泉⁷⁾の描いた黒天鵞絨の腕守りなども、「昔の女の異国趣味を現したものでせう⁸⁾」と述べている。この宮川の言う異国趣味は、宇野の黒縹子への好みと通ずるものがある⁹⁾。

和装の2頁目には写真家福田勝治が撮影した宮川静子の写真（図1）が掲載されている。これは、『スタイル』に掲載されたはじめての和装写真である。静子の装いについては、父である曼魚が以下のように解説している。



図1 宮川静子(図版引用 復刻版『スタイル』第1巻第2号 35頁)

根掛と半襟は、麻の葉模様の緋鹿の子——といふよりも色のさめた時代裂で、寧ろ朱鹿の子——着物は、格子縞のトビ八丈。裾廻しは紫です。帯は、伊勢由の唐棧柄の風呂敷を、三枚分続けて切らせて三本とった半幅帯で、鼠地に紺と朱の線のあるもの。前掛は、紬地菊模様の更紗。帯止は、紫と白の平打。¹⁰⁾

『スタイル』に掲載された和装写真について、青木はモデルが誰であるかについての集計を行っており、芸妓¹¹⁾に次いで令嬢の写真が多いこと、そして、古典的なきものを着用する令嬢と新しい感覚のきものを着用する令嬢に分けられると指摘している。令嬢の写真の多くは、写真撮影を意識した振袖姿や晴着であるが、静子の装いは、それとは異なる日常の装いである¹²⁾。

静子の写真は『スタイル』に計3回掲載されている。第2巻第6号（1937年6月号）に掲載された名越辰雄撮影による静子の写真は、「深川娘の代表的なお姿です」と記されている¹⁴⁾。また、第3巻第10号（1938年10月号）の「和服訪問 宮川曼魚先生」では、宇野は、静子について「お父上のご趣味によって、浮世絵の中の小町娘そのまま、うっとりで見とれるほど、お美しいお嬢さまです¹⁵⁾」と述べている。また静子の装いについて、「こんなにお若いお嬢さまが、こんなに地味な、渋いお召物であることが、却って、言ひやうのない奥床しい美しさを感じさせる¹⁶⁾」と述べている。この和服訪問の際に宇野が締めていた帯は、曼魚好みの静子の半幅帯と同じ手織り木綿を丸帯に仕立てたものである¹⁷⁾。

『スタイル』における初めての和装記事として、宇野による「新しいきもの」に繋がる「異国趣味」の帯が掲載され、宮川曼魚の江戸趣味を反映した宮川静子の写真が掲載されたことは興味深い。宮川曼魚は、宇野の古着あさりや古裂への感心などに大きな影響を与えたと思われる。

3. 森田たまの随筆に描かれた宇野千代の和装

『スタイル』には、第1巻第2号以降、和装を題材とした随筆が掲載されている。執筆者は、文学者や芸術家、舞台関係者まで幅広い。そのなかで定期的に随筆を寄せているのが森田たまである¹⁸⁾。第1巻第3号（1936年8月号）に掲載された森田の随筆「お手本」は、7月末の晴天の午後、緑の木立に囲まれた広い芝生の庭のある白い洋館の客間を訪れた宇野千代の姿を以下のように伝えている。

・・・黒衣着物に黒い帯、黒い日傘、黒い草履をはいて、胸にかかへたハンドバックの燃える紅と足袋の白さがぱつと眼を射た。私の待つてゐる、それが宇野千代さんであった。

宇野さんは芝生を横ぎり笑ひながら「お待たせしました」と近よつて来られたが、青い空と緑の樹立と草色の芝生と、さうして上から下まで黒い装ひと、その中でにつこり笑つた宇野さんの皓い歯が、眼ざめるやうに涼しかった。

黒のさつま上布に黒縹子の帯を、きりりと結んでをられたのである。おなじ黒でも沙とかか絹とかさういふものであつたなら、あれほど涼しくはなかつたかもしれないが、黒縹子の帯はつやつやと濡れたやうに光つてゐて、さつま上布の冷たさとおなじ手ざはりが感じられる。あの日の宇野さんの装いは、触感の冷たさを眼に訴へた涼しさだとあとになって気がついたが、宇野さんの鋭どさはさういふところにもあらはれて、常人には真似ても真似られるものではなかつた。

宇野さんのこのお手本をやぶる人はないものか。服飾もまた一つの藝術ではなからうと心ひそかにおもつている。¹⁹⁾

森田は、黒いさつま上布と黒縹子という、夏の和装の常識を逸脱した組合せについて、「触感の冷たさを眼に訴えた涼しさ」だとして、常人には真似ることができない宇野の鋭い感覚を絶賛している。宇野自身の随筆「黒縹子」（第1巻第5号掲載）は、季節を問わず黒縹子の丸帯を締め通した時期があつたことを伝えているが、徹底して向き合うことで、黒縹子という素材の持つ本質を見極めていたのかもしれない。

4. 新しいきもの

1) 第1巻第4号に掲載された宇野千代の創案きもの
第1巻第4号（1936年9月号）には、綴れ織りの粗い格子の着物とカーテン地の帯の写真（図2）が掲載されており、以下のように説明されている。

まだセルには早い九月。でももう秋草が咲き乱れて袂を払ふ涼風に、さて何を着てみませう。

写真は筆者お得意の創案もの、つづれ織の荒い格子、撚の強い絹織物なのですがちよつと見ると毛織物のやうなざくりとした肌触り。太い格子は鈍いチョコレート色、間の細かい織り出しは豊か

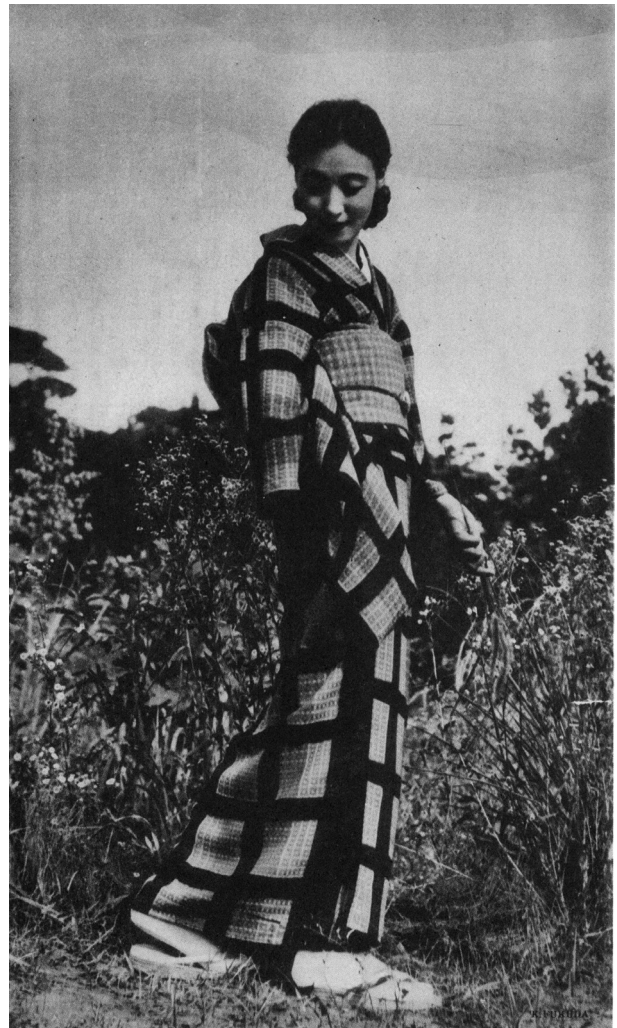


図2 宇野千代による創案きもの(図版引用 復刻版『スタイル』第1巻第4号 18頁)

な珊瑚色の濃淡です。その色感の深さは、ちよつと形容する言葉がないくらゐです。柄も布地もどちらかといふと、在来の和服の型を破つたものですが、袷に移るまでの不断着に惜し気なく着たいもの。帯は例の、わざと作つて見た高島屋のカーテン地、ごつい木綿織物の渋さは、なかなか着物に負けません。この帯と着物の美事な配色が、写真に出ないのは残念です。²⁰⁾

この文章から、宇野がきもの季節感に鋭い感覚を持つと共に、和装の常識にとらわれない大胆な感覚を持っていたことがわかる。帯の色彩については、ここでは触れられていないが、先述したように第1巻第2号の「みをつくし」では、「くすんだ桃色に淡墨をまぜたゆたかな渋い色の感じ」と述べられている。²¹⁾

2) 第1巻第5号に掲載された「新しい日本の着物」

10月13日の『朝日新聞』には、早見君子²²⁾の署名記事が掲載されている。それは、若い女性の和装に関するもので「この頃お嬢さん方の和服姿に小さな革命が起こつてゐます、それは、今迄の令嬢姿のコツテリした重さをみんな振り捨て、平易な無雑作な、それでゐて相当苦心のあとの見える姿なのです。」とある。着付けの専門家である早見は、「しかしそれはあまりにも取りつくろはな過ぎて、真昼の外出にはいかがかと思はれますが、また何か若々しい新しい生命があつて、惹かれる気持ちでもあります。」と続け、断髪に合う「可愛らしさも乙女らしさも上品」な外出着を提案している²³⁾。

『スタイル』第1巻第5号(1936年10月)に掲載された宇野千代の「新しい日本のきもの」もまた、若い女性の間の着物の流行を受けて掲載されたものである。宇野は、早見とは異なる視点で、以下の提言を行っている。

このごろ洋服党の若いお嬢さんたちの間に、また日本の着物を着ることが流行つて来ました。

でもそれは、全く楽しみのために着るニホンのキモノという解釈で、これまでの単なる和服とは、着る気持ちがまるで違つてゐるやうです。布地も柄も思ひきつて異国風な、タフタ、クレープデシ、さまざまな毛織物の変り織、柄も細かいチェックプリント模様などを大胆に、平気で和服にしてさふ、つまり和服を一種の洋服の延長として考へる解釈です。広幅物四ヤールの洋服地で作る和服。試みに、あまりお値段の張らないプリントもので裕をつくつてごらんになりませんか。とても新鮮な感じの洒落た散歩着、部屋着が出来ます。

こんな場合は帯も何か、変つた布地を見つめるのも楽しみです。帯止も思ひ切つて、ガラス、革紐など洋服のバンドの飾りの意気でやつて見てはどうでせう。頭髪もシングルの断髪よりも、少し長い目のカールしたパーマネント、あの「最後の戦闘機」に出てゐるアナ・ベラの扮したエレヌのあの古風な髪など、面白くはないでせうか。

とにかく、これまでの和服のあんまり四角ばつた習慣を、思ひきり破つた、自由な解釈のキモノを、もう一度着直して見るのです。前述の型はその一例ですが、応用の範囲はなかなか広いと思ひます。自分の着てみたいと思ふ布地、柄なら何で

もそれがたとへ和服としては、思ひきり型破りのものであつても構はずに着て見るだけの洒落つ気を出して見ることです。行詰つた和服の型も案外、変転極らない新しいキモノの味を持ち直すことでせう。²⁴⁾

ここでは、既成概念に囚われず、自分が着たいと思うものを着てみるのが推奨されている。早見が、外出着として容認できるような着こなしを提案したことに対して、宇野は自分の楽しみとしての、思い切つた散歩着、部屋着を提案している。宇野と早見の提案は、一見、真逆のようにも見えるが、和装に対する感覚には共通する部分が多く、早見は、『スタイル』第2巻第1号(1937年1月号)において、「マドモアゼルの着付け」を担当している。

宇野は第1巻第5号には、「新しい日本の着物」とは別に「黒縹子」という随筆を掲載しており、黒縹子を大島の裾よけや袖口布、衿さき布、掛け衿などに付けた効果について述べた後、以下のように若い女性のための提言を行っている。

・・・もう着られないなと思つた古い着物も、この黒縹子の掛け衿一つで、何とも云へない、まるで別の着物になる。派手で着られなくなつたものもちよいと黒衿をかけて見ると、その黒い襟の線で着物の派手な感じを隠してさふ。黒衿と言へば下町趣味と極まつてゐたが、案外パーマネント・ウエーブのお嬢さまのお部屋着などに、逆の異国趣味的な味があるのではないか知ら。

日本の着物ももう一ぺん、凡ての規則をなくして、もみくしゃにしてさつて、勝手なものを勝手なときに勝手な風に着て見る、——さういうキモノの一つとして、黒襟をかけて見てはどうか知ら。

この場合の断髪は、なるべくお襟足を細く見せた、上向きのカール。但し、どこまでもお部屋着の程度であること。²⁵⁾

どう見えるかを気にするのではなく、自分が着たいものを自由に着るといふ大胆な提案を行いながら部屋着に限定するところに、宇野のきもの文化に対する理解と経験を見ることが出来る。それは、森田たまが絶賛した、宇野の鋭い感覚の土台となるのである。

黒縹子の襟については、1937年2月6日の『読売

新聞』に、「流行を創る 久留米ガスリに黒縹子の衿」として、久留米緋のコートに黒縹子をつけたシックでモダンな久留米緋のコートが提案されており、「布地も型もすつかり日本趣味ですが、着てみると反対に新鮮な感覚の出るところ、若い婦人にも調和するでせう」という記事²⁶⁾が掲載されている。

3) 島津マネキンの新しいキモノ

『スタイル』第1巻第5号には、島津マネキン展から、新しい着物が2着(図3)紹介されている。1着は、プリントの花模様のクレープ地の散歩服であり、もう1着は黒と緑の碁盤縞で「セルの時間に相応しいウール地です」と説明されている²⁷⁾。

1937年3月18日の『読売新聞』には、「流行を創る 平面で動きのない日本のキモノの約束を破る」という記事が掲載されており²⁸⁾、島津研究所による「従来の日本服から全く束縛されずに而もキモノと



図3 島津マネキンと新しいきもの(図版引用 復刻版『スタイル』第1巻第5号 34頁)

しての特徴を失ふことのない新傾向のキモノ」が紹介されている。アップリケの花嫁衣裳や和洋折衷のドレスのようなきものと共に、銀色のラメのきものにアストラカンの帯を組み合わせた吉田謙吉²⁹⁾によるきものが取り上げられている。吉田のデザインは、形は元禄袖のきものままでありながら、素材を大胆に代えたものである。

この吉田の新しいきものは、宇野により、『スタイル』第2巻第7号(1937年7月号)で、紹介されている。宇野は、吉田の発想に驚きながら、「ほんたうに街を歩くときのキモノとしては、或ひは少し、目立ち過ぎるかも知れませんが、これからの新しいキモノを着てみようと思う勇気のある人には、一つの素晴らしい啓示です。よくごらんになつて下さい。何てまあ、きれいなキモノでせう」と述べている³⁰⁾。宇野にとってきものは、見るものではなく、自分が着るものであったから、これは素直な感想であったと思われる。実際にはこれらのきものが街着として着られることはなかったであろうが、和装に変化が起きていたことは事実である。

今和次郎は、1937年5月に「和装のほうは、このごろ特別に、きわだつて色も柄も工夫されて流行的になつてきましたので、私たちの沈滞しがちな感覚をぐんぐん新たにしてくれています」と述べている³¹⁾。『スタイル』誌上においても、第2巻第2号(1937年2月号)の式場隆三郎による随筆「和服の美」において、「街を歩いてみて、ちょっと振り返ってみたくなるほど華美な女は、やはり和服の方が多い」と述べられている。式場はまた

住居が服装を変化させることは、いふまでもない。現代の日本の婦人は、同じ和服をつけても、明治やそれ以前の女とは随分違ってゐる。住居と生活の変化が、着物をも変化させた。材料の違いだけでなく、織方や模様や縞まで変化した。二三年前黄八丈が復活しかけたことがあるが、あの昔ながらの手法のままでは現代の女には合はない³²⁾と述べている。

4) 新しいキモノ具現化の試み

①女優桑野通子が着る宇野千代の「新しいきもの」第1巻第7号(1936年12月号)には、女優の桑野通子が着用する宇野千代デザインの「新しいきもの」の写真(図4)が掲載されている。キャプション



図4 桑野通子が着用する新しいきもの(図版引用 復刻版『スタイル』第1巻第7号 33頁)

ンには以下のように記されている。

キモノは黒の変わり織クレープに眼もあやな黄赤緑のプリント花模様、ヤール巾の洋服地を仕立て上げた新しい試み。帯はまた思い切った黄と紺の太い縞、あのデッキチェアに張るコワイ布なのですが、この大胆な色調の素晴らしさは、どんな豪華な着物の帯にも負けない積もりです。新しいキモノは何でも、³³⁾—あなたのお好きな布地で、どうぞ自由に。

生地を提供は高島屋である。素材、色調共に大胆な取り合わせであり、これは、「新しい日本の着物」での提言を宇野自身が具現化を試みたものである。

②モダン元禄調

第2巻第3号(1937年3月号)には、「モダン元禄調」が掲載されている。(図5)これは、白木屋呉服店によるもので、着付けは、早見君子である。

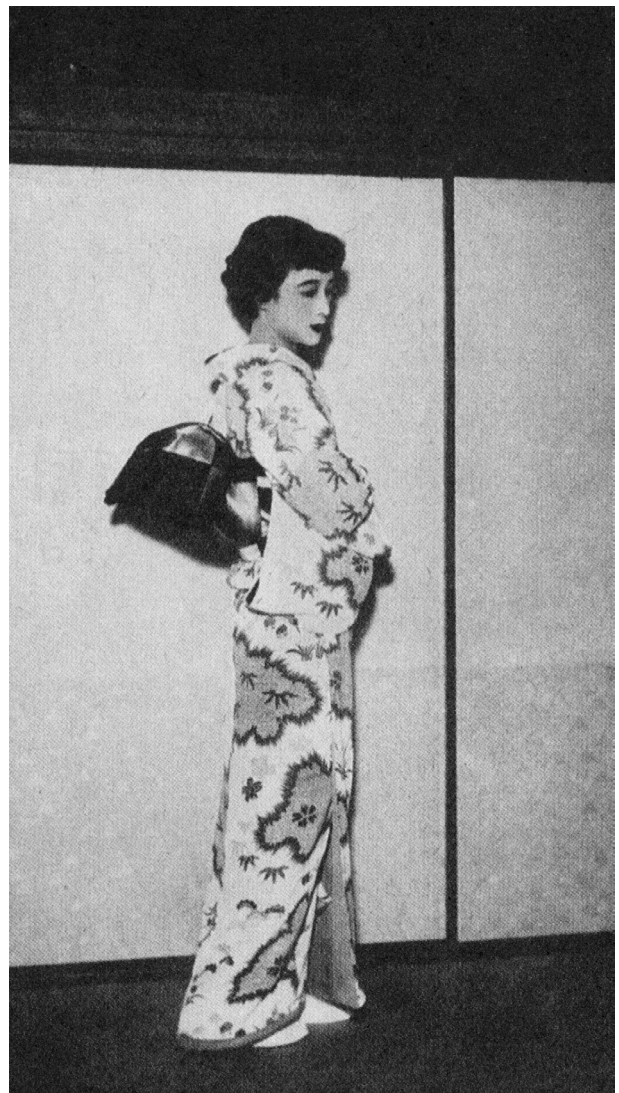


図5 モダン元禄調 (図版引用 復刻版『スタイル』第2巻第3号 39頁)

現代化した元禄風の着物です。断髪のお嬢さまの新しいお召物の様式として、お気に入りませんか。袖をもう少し長く、一尺八寸くらゐにして、帯をずっと低く裾ふきも普通にすれば、そのまま街へも出られます。履物は革のお草履、着物も思い切つて洋風の細かいプリントものなぞ、イカガですか。帯は出来るだけ単純な、強い色調のカタイ織物に限ります。³⁴⁾

ここでは、すこしの工夫で街着にできることが強調されている。翌月の読者欄Q&Rには、モデルの髪をセットした美容院についてと「モダン元禄調」の布地についての質問が掲載されており、編集部は、「元禄調の布地は、試作的に新しい意匠をやってみたものなので、写真のものはレーヨンの小紋で作りました。ほんとならば、縮緬などの落ち着いたしっ

とりしたもので作りたいものです。」と回答している。³⁵⁾この回答から、読者の反応をみながら「新しいきもの」の具現化が行われていたことがわかる。

この頃、読者欄には、和装に関する質問が一定数見られるが、新しいきものに関するものとしては、第2巻第2号(1937年2月号)の「みをつくし」に掲載された男物のオーバーの裏地の派手なチェックの織物で和装用のコートを生立てることについて、春のコートにはどうかという質問³⁶⁾や、洋服地での帯やプリント・デシンで和服を作りたいという相談³⁷⁾などがある。

5) 新しいセルのキモノ

第2巻第4号(1937年4月号)には、「新しいセルのキモノ」が掲載されている。

誰でも着てみるセルのキモノの替りに、特色のある洋服地のウールの単衣を着てみようとお思ひにはなりませんか。一着物のお値段は普通のセルに較べると、いくらか張りますが、実に魅力のある、味はひの深いキモノが出来上ります。柄の選択も思ひきり自由に、思ひきり強烈な色彩でも平気です。バタ臭い感じのものほど面白い効果があります。写真にある三つの布地はその一例。何れも断髪の若いお嬢さま向。写真には色彩が出ないので残念です。

いつだったか私も、濃いブルーの無地の、男物洋服地のツキードで、セル代用のキモノを作つて見たことがありました。これはちよつと想像も及ばないやうな逸品でした。まる七八年、春秋ともにこの一枚を着ましたが、着るたびに、肌ざはり、ふうはりとした軽い重量、色の深さ——無地のキモノの強さで、顔が浮んで見える感じなど、(ああ、好いキモノだな)と、われ乍ら嬉しくなったものでした。私お自慢のキモノの中の第一です。³⁸⁾

セルの代わりにウールは、第1巻第5号掲載の島津マネキンの新しいきものにも見られるが、ここで断髪 of 若い女性に向けとして提案されている布は、くすんだピンク色地に鼠色濃淡の格子、白地に黒黄赤の強烈な原色の縦縞、赤緑白藍黒のタータンチェックといったコントラストの強い色彩である。一方で、セルの代わりにウールを着た経験として、宇野自身がかつて着ていた男物の洋服地のきもの

のが紹介されている。ここで宇野は、無地のきものによって顔が浮かんで見えると述べており、これまであまり語られることがなかった、無地への志向を見ることができる。

5. 森田たまの「緑の着物」に描かれた宇野千代の新しいきもの

先述したように森田たまは、定期的に『スタイル』に和装に関する随筆を寄せているが、「緑の着物」は、第2巻第5号(1937年5月号)に掲載されている。森田は、3月中頃に会った時の宇野の和装の新たな好みについて、以下のように述べている。

・・・緑といふ色はもともと深い味のある、何ともいへぬいい色であるかはり、一方にまたへんに気むづかしいところがあり、それを主調にうまく着こなせるといふ人は殆ど見あたらずところから、いつの時にも流行りさうで流行らない。その一ばんむづかしい色合を、宇野さんは見事に征服されたのである。

深い緑にほそい黒で、桜の花のやうな小模様が浮織風になつてゐる。しなやかな感触は普通お召かと思受けたが、これが洋服地の何とかいふ新しい生地ときいて、私はおもはず手にふれて、そのお召ものをさはつてみた。木綿がはいつてゐるのでせうと云はれても、その手ざはりはどこにもない。しつとりと落ち着いた、しかも軽やかな感じである。

さういふ生地を和服に仕立て、帯はいつぞやの御自慢の、さびた桃いろに丸い小模様の木綿もの。黒のお羽織に黒の半えり。帯メは黒と黄色のびらうどのリボンを縫ひあはせ、たもとにこぼれるじゅばんの袖は、やつぱりさびた桃いろの、絹ちぢみにしては色目がハイカラだとおもつたところ、それもおなじく洋服の生地と承つて、今更ながらつくづく宇野さんのそのお姿を、見あげ見おろし、新しい和服の味に、文字どほり見惚れたのである。

むづかしい緑のいろも、配色次第でなごやかに、色の白い人なれば一そうその白さをひきたてて、あくぬけして見えるであらうが、しかしおなじ緑のいろでもそれが在来の日本の和服地であつたなら、かうはいくまいとおもはれる。・・・

宇野さんの鋭さは、洋服地にそれを見つけた、

その先見の明にある。更にそれに配するに、オールローズと黒とをえらみ、帯メにまでリボンをもちひてみられたところに、新しい美の創造があるのであつた。私はさきに宇野さんの装ひを服飾のお手本とおもひ、このお手本をやぶる人はないものかと書いた事があるのだけれど、いま又その感を新しくして、もう一度、このお手本をやぶる人はないものかと云はずにはゐられない。ウールの生地をセルのかはりに着るといふ宇野さんのお好みは憎らしい程である。³⁹⁾

この「緑の着物」は、宇野自身が実践する「新しいきもの」について、具体的に伝えてくれる資料である。それは、単に珍しい洋服地を使うといったものではなく、素材のひとつひとつを鋭い視点で吟味した結果であり、必然に基づいて選ばれたものであった。これは、きものについての豊富な知識と経験をもつ宇野だからこそできることであり、森田が言うように誰もが真似のできるものではなかった。

6. 「新しいきもの」のもう一つの側面

宇野が「新しい日本の着物」を掲載した第1巻第5号の巻頭グラビアは、⁴⁰⁾ 鏑木清方 風に装った女優の入江たか子(図6)である。撮影は吉屋信子邸で行われ、吉屋は「背景と人を得て、鏑木清方が描ける如きその姿よ。黄八丈に黒の衿、帯、黒塗りの下駄、青きは一つ、君が匂ふ黒髪⁴¹⁾の翡翠の簪の玉なりき」という短文を寄せている。第1巻第5号には、この巻頭グラビアに呼応するように、巻末近くに明治時代の風俗に装った14歳の河野綾子⁴²⁾の写真が掲載されている。この2枚の写真は、『スタイル』に掲載された和装写真の中で特異な存在と言える。

宇野は、第2巻第2号(1937年2月号)の「下駄の古典調」の中で、「この頃、私は古着あさりの趣味を覚えて、しきりに明治時代の古裂を探し出し、『築地明石町』型の風俗に浮身をやつすことがある⁴³⁾」と述べている。《築地明石町》は、《新富町》《浜町河岸》と三部作をなす鏑木清方の代表作で、外人居留区だったころの明石町の風景に当時のモダンな装いの女性が描かれている。第1巻第5号に掲載された宇野の「新しい日本の着物」は、若い女性の着物の流行へのエールであったが、同じ号に掲載された明治風俗に装った入江たか子と河野綾子の写真には、宇野の日本のきもの文化に対する深



図6 鏑木清方風に装った入江たか子(図版引用 復刻版『スタイル』第1巻第5号 1頁)

い理解と遊び心を見ることが出来る。宇野の古着あさりもまた、同様にきものへの深い理解と遊び心により始まったと思われる。

第2巻第7号(1937年7月号)の「古着あさりの面白さ」では、遠目には無地に見える細かい縞の男物のお召しの着物を見つけ「呆れるくらゐの美しい織物だつた。買って来るとすぐに鏡の前で自分の胸にあてて見た。きれいだ。この渋い派手さの中で、顔が浮かんで見える。」⁴⁴⁾と記している。この「顔が浮かんでくる」という感覚は、「新しいセルのキモノ」(第2巻第4号)の男物のツイードで作ったきものにつながるもので、森田たまが「緑の着物」(第2巻第5号)において、「ウールの生地をセルのかはりに着るといふ宇野さんのお好みは憎らしい程である。」⁴⁵⁾と述べた、宇野の独特の感性である。これは、きものへの深い理解を持ちながら遊び心を忘れず、常識に捕らわれない自由な発想が生み出すものである。

7. 新しい無地のきもの

1) 一もしも若い— お嬢さんだったら

第2巻第11号(1937年11月号)には、「一もしも若い—お嬢さんだったら」と題した若い女性に向け

た、新しいメッセージが掲載されている。

この頃古着屋へよく出掛ける。自分の着物を買ふ積もりで出掛けて、あれこれと引繰り返してゐる中に、欲しいなあと思つて手に取るのは、大抵女物ではなくて男物だ。そのたびに、男になりたいなあと思ひます。男物の着物の方が味があるのです。たうとう、その男物を買つて、自分の着物に縫ひ直したりすることになるのですが、女の着物もそれくらゐ地味なものを使うと、案外面白いものになります。女物は派手なもの、男物は地味なもの、画然ときまりをつけて了つてゐるのは、日本の着物の習慣ですが、必ずしもそれを守らなくてはならないとも限りません。洋服では平気で、黒だの紺だの無地の布地、細かい縞、ちよつと日本の小紋のような細かいプリント模様などが使はれてゐますでせう、あの傳で、思い切つて無地物だの細かい柄のものを女物に仕立てて観ると、これまでの女の着物には見られなかつた、或る新鮮な美しさを発見して、びつくりして了ふんです。全く信じられないくらゐの逆効果で、地味な着物であればあるほど、顔が着物の中から浮かんでゐる感じで、それは美しく見えるのです。⁴⁶⁾

ここでは、明確に男物、女物という和服の素材の決まり事を超える事で、新しい美しさが生まれることを公言している。

2) 細かい柄のキモノ

宇野はこの後、第3巻第2号(1938年2月号)に「細かい柄のキモノ」と題して、古布を模して作られた銀座ミラテスの古代銘仙を使った新しいきものを紹介している。

和服で新しい効果、新鮮な魅力をネラフ一つの方法は思ひ切つて細かい柄のキモノを着て見ることです。

このモデルのお嬢さんは稀に見る特異な美貌の持主で、そのためにも一層キモノが生きてゐるのですが、細かい柄のキモノは、かういふバタ臭い感じの顔、バタ臭いメーキャップの場合に一層びつたりするやうです。この着物は銀座『ミラテス』特製の銘仙で、渋い格子縞。袖はわざとまる

い元禄に見ましたが、(丈は普通のお嬢さまの袂よりずつと短く)帯と塗り下駄の色をアクセントにして、ちよつと面白い味です。帯はなるべく半幅、出来るだけ強烈な色の無地か、単純な模様で、キモノを生かすこと。着付けはでこでこにならぬやう、何気ない形にして下さい。

・・・

春風が吹いて来たら、だまされたと思つてたった一枚だけ、こんなキモノを作つてごらん下さい。洋服地の細かいプリントでも、薄いウールでも縞でも、緋でも、構ひません。⁴⁷⁾

グラビア写真(図7)には、「浅草の観音さまのお堂です。あなたはキリシタン・バテレンの娘、異様に妖しい黒瞳の美しさ。——着物は渋い手織古代銘仙、黒緋子の帯と黒塗りのあどまるの下駄。そこはかとな元禄調の時代錯誤的な美がネラヒです」⁴⁸⁾という文章が添えられている。



図7 細かい柄のキモノ(図版引用 復刻版『スタイル』第3巻第2号 45頁)

銀座ミラテス⁴⁹⁾の広幅手織り銘仙は、第1巻第4号(1936年9月号)で女優の桑野通子が着用した「スタイル推薦衣裳」の素材として用いられており、以後、『スタイル』には数回登場している。ここでは、新たにミラテス特製の古布を模した銘仙を使い、あえて時代ものらしい元禄風のきものを作るという遊びところが提案されているとも思える。しかし時局の変化により、このような遊び心を楽しむことは許されなくなり、以後、古着や古裂に関するものを除くと「新しいきもの」に関わる新たな言及はなされていない。

9. おわりに

本稿では、『スタイル』第1巻から第3巻6月号までを主な資料として、宇野千代の提唱する「新しいきもの」が具体的にどのようなものであったかを考察した。第1巻第5号(1936年10月号)に掲載された宇野の「新しい日本の着物」は、若い女性の着物の流行を受けて掲載されたものである。そこには、洋服地を用いるなど、和装の習慣にはなかった新しい提言がみられるが、その具体的な実践は、きものに対する深い理解と数多くの経験に基づく鋭さが求められるものであった。随筆家森田たまが伝える宇野の装いは、宇野自身による「新しいきもの」の実践であったが、それは宇野の鋭いそして独特の感性によってのみ可能な装いであり、誰もが真似のできるものではなかった。

「新しいきもの」のもう一つの側面として、古着あさりを通して男物のきもの持つ素材の美しさを見出し、男物、女物という和装の習慣を超えた無地あるいは遠目には無地に見えるような深い色のきものこそが、若い美しさを引き立てることが主張されている。この新しい美しさは、第3巻第2号(1938年2月号)において、古布を模して織られた古代銘仙のきものと黒縹子の帯という新しいきものとして具現化が試みられた。このように「新しいきもの」は、宇野のきものへの深い理解と常識に囚われない独特の感性によって生まれ、『スタイル』誌上においてその具現化が試みられた。この経験は、宇野が戦後、着物デザイナーとして活躍する際に生かされることになる。

- 1) 高橋晴子『近代日本の身装文化「身体と装い」の文化変容』、三元社、2006年、p.117
- 2) 青木淳子「雑誌『スタイル』初期にみる宇野千代のキモノの美意識」、語学教育研究論叢、第34号、2017年、pp221-236。
- 3) 『スタイル』創刊初期は、毎号のように誌面の構成が変化する。和装に関する頁は第1巻3号では4頁、第4号から6頁となる。『スタイル』創刊初期の誌面の変化については、拙稿「宇野千代編集の雑誌『スタイル』に関する一考察 ―初期の誌面の構成を中心に―」[山口県立大学学術情報第14号(国際文化学部紀要 通巻第27号)2021年、pp.95-104.]において考察した。
- 4) 「みをつくし」は、第1巻2号(1936年11月号)から第2巻第12号(1937年12月)までに7回掲載されている。第2巻第3号(1937年3月号)には、「みをつくし―とはみをつくしてぞーの略にあらざ。船路に打つ杭―滯標の意なりとこそ」と説明が書かれている。(『スタイル』第2巻第3号、p.36)
- 5) 宇野千代「みをつくし―夏の和装のご注意帳―」『スタイル』第1巻第2号、p.34。
- 6) 宮川曼魚(1886-1957)随筆家、鰻屋「宮川」主人。『スタイル』には主に男物の和服に関する随筆やコラムを寄稿している。
- 7) 溪斎英泉(1791-1848)江戸時代後期の浮世絵師。
- 8) 宮川曼魚「みをつくし―夏のうすものその他―」『スタイル』第1巻第2号、p.18。
- 9) 宇野千代「黒縹子」『スタイル』第1巻第5号、p.34。
- 10) 『スタイル』第1巻第2号、p.35。
- 11) 芸妓の写真は、第1巻第3号から第5巻第8号(1940年8月号)まで毎号掲載されている。1910年代から、新聞や雑誌は、芸妓の写真や花柳界の記事の掲載を避けるようになり、1930年代には『スタイル』を除くと女性を対象とした雑誌に芸妓の写真が掲載されることはなかった。この時期には芸妓のきものとその装いは様式化されており、和装の流行に影響をあたえることはなくなっていた。本稿では、「新しいきもの」という側面を中心に検討を行うため、『スタイル』における芸妓写真については稿を改めて考察する。
- 12) 青木淳子、前掲論文、pp228。

- 13) 第2巻第7号(1937年7月号)において、早見君子は、和装の着付けの専門家としての視点から、静子の着こなしにふれ、その半襟は「ふだん着調」を出していると共に、一般的にはやや細めの出し方が若さと可憐さをだすのであるが、静子の場合は「お胸をせまく見せるためにも、此の程度の出しかたが結構と思ひます」と評している。
(早見君子「半襟の表情」、『スタイル』第2巻第7号、p.41。)
- 14) 『スタイル』第2巻第6号 p.57。
- 15) 宇野千代「和服訪問 宮川曼魚先生 浮世絵の小町娘」『スタイル』第3巻第10号 p.32。
- 16) 同上 p.33。
- 17) 宇野千代「お江戸趣味」、『スタイル』第3巻第10号 p.46-47。
- 18) 森田たま(1984-1970)小説家・随筆家。
- 19) 森田たま「お手本」、『スタイル』第1巻第3号 p.18。
- 20) 『スタイル』第1巻第4号、p.18。
- 21) 注5に同じ。
- 22) 早見君子(1885-1963)美容家。
- 23) 『朝日新聞』1936年10月13日朝刊。
- 24) 宇野千代「新しい日本の着物」、『スタイル』第1巻第5号 p.33。
- 25) 宇野千代「黒縹子」、『スタイル』第1巻第5号 p.34。
- 26) 『読売新聞』1937年2月6日朝刊。
- 27) 『スタイル』第1巻第5号 p.34。
- 28) 『読売新聞』1937年3月18日朝刊。
- 29) 吉田謙吉(1897-1982)舞台美術家。
- 30) 宇野千代「自由なキモノ」『スタイル』第2巻第7号、p.49。
- 31) 今和次郎「昭和一二年の和洋装」(『生活と趣味』一九三七年五月 原題「和洋装の流行批評」)『服装研究』ドメス出版、1972年、p.170。
- 32) 式場隆三郎「和服の美」『スタイル』第2巻第2号(1937年2月号)p.49。式場隆三郎(1898-1965)精神科医。
- 33) 『スタイル』第1巻第7号 p.33。
- 34) 宇野千代「モダン元禄調」『スタイル』第2巻第3号、p.39。
- 35) Q&R,『スタイル』第2巻4月号、p.66
- 36) 注35に同じ
- 37) Q&R,『スタイル』第2巻5月号、p.66
- 38) 宇野千代「新しいセルのキモノ」『スタイル』第2巻4月号、p.47。
- 39) 森田たま「緑の着物」、『スタイル』第2巻第5号 P.43。
- 40) 鑄木清方(1878-1972)日本画家・随筆家。
- 41) 吉屋信子「美女讃」『スタイル』第1巻第5号 p.1。
- 42) 河野綾子は医学博士河野勝齋の令嬢。日本舞踊の名手と記載がある。
- 43) 宇野千代「下駄の古典調」『スタイル』第2巻第2号、p.50。
- 44) 宇野千代「古着あさりの面白さ」『スタイル』第2巻第7号、p.46。
- 45) 注39に同じ。
- 46) 宇野千代「一もしも若い—お嬢さんだったら」『スタイル』第2巻第11号、p.66。
- 47) 宇野千代「細かい柄のキモノ」『スタイル』第3巻第2号、p.46。
- 48) 『スタイル』第3巻第2号、p.45。
- 49) ミラテスは、井上房一郎による家具工芸店。1935年2月に開店したミラテス銀座店は、ブルーノ・タウトと井上等により開発された新しい工芸品を販売する店である。ミラテスの広幅手織り銘仙を使用した『スタイル』のオリジナル衣裳については、拙稿「宇野千代編集の雑誌『スタイル』における初期グラビアと「スタイル推薦衣裳」について [山口県立大学学術情報第15号(国際文化学部紀要 通巻第28号)2022年、pp.197-205]において考察した。